山崎郷土研究会報

NO. 135
令和2.8.30
山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町
大谷司郎

明治以降の山崎の年表（八）

大谷司郎

昭和四十九年から五十四年の頃

明治以降の山崎を中心とした出来事を年表にして八回目になります。今回は、昭和四十九年（一九七四）から昭和五十四年（一九七九）までを取り上げます。

農作業の機械化が進行　この頃から、水稲栽培における農作業の機械化が進み、従前の家内総出、隣近所の共同作業での田植えや刈取りの手作業から、田植機や脱穀機等の機械を中心とした作業に変わります。また、耕耘機からトラクターに変わるのもこの頃で、小中学校の農繁期休業が徐々に廃止されていきます。

中国自動車道の開通　中国自動車道は吹田市を起点に西へ西へと敷設工事が進んでいき、昭和五十年（一九七五）には兵庫県下の全線が開通となって、早速高速バスが津山ー大阪間で運行し、そのあと、波賀町から大阪行きも開通して阪神間が近くになりました。

相次ぐ台風被害　昭和五十年九月に台風の襲来で家屋浸水、河川の氾濫、道路や橋梁の流失など町内の広い範囲で甚大な被害を受けました。翌五十一年（一九七六）にも同じく台風による大きな被害が出ています。中でも一宮町下三方の山津波は多くの人の記憶に残っているところです。

『山崎町史』の発刊　昭和四十五年（一九七〇）から始まった編集作業は宇野正碆編集委員長はじめ町内の六人の編集委員が中心となり、七ヵ年を費やして昭和五十二年四月に発刊されました。

千本屋廃寺発掘調査の実施　山崎インターチェンジ周辺の道路改良に伴う千本屋廃寺の寺域確認調査が発掘調査団を編制して、昭和五十二年二月から三年間に亘り、大がかりな調査が実施されました。多数の瓦等の発見や古代寺院跡として、貴重な遺跡であることが確認されました。

目次

明治以降の山崎の年表（八）……大谷司郎 1
山崎の美術の流れ（一）……伊藤一郎 4
福原謙七と『論語』……鎌田裕明 6
広瀬宇野氏滅亡後の宍粟……竹内克司 9
山崎婦人会発足の歴史と現在……三渡眞由美 12
山崎歴史郷土館（五）……河本雅視 14
空中写真と地図（その4）……清水哲 16
伯牙弾琴鏡銘帯の「璥」について……片山昭悟 20
会員・家族の文芸……24
事務局だより・研修旅行中止のお知らせ……25
編集後記……25

明治以降の山崎の年表（15）　昭和49年～54年

西暦年	和歴	年	月	日	事　　項	出 典 等
1974	昭和	49	2	20	学校問題審議会が中学校統合について答申書を出す。	広報やまさきS56.8.5特集号
1974	昭和	49	7		第132回議会で議長に中坪友男氏、副議長に川前房夫氏が選任される。	議会第200回のあゆみ
1974	昭和	49	10		農家花嫁銀行制度が発足する。	議会第200回のあゆみ
1974	昭和	49	10		第133回議会で議長に川前房夫氏、副議長に大友寅一氏が選任される。	議会第200回のあゆみ
1975	昭和	50	2	11	山崎町山田に「センターかしわの」が開設され、完成式が行われる。	神戸新聞西播のページS50.2.13
1975	昭和	50	3	1	山崎町文化連盟結成総会が行われる。	神戸新聞西播のページS50.3.1
1975	昭和	50	3	1	宍粟広域センター落成式が行われる。	山崎新聞第2164号
1975	昭和	50	4	1	財団法人博愛病院が宍粟郡民病院となり、診療を開始する。	山崎町制施行40周年記念誌
1975	昭和	50	4	1	中学校から高等学校への進学率が91.4%となる。	山崎町史
1975	昭和	50	4		山崎町歴史民俗資料館が開館する。	広報やまさきNo.388
1975	昭和	50	5	1	土万小学校校舎が完成する。	山崎新聞第2140号
1975	昭和	50	5		城下小学校校舎が完成する。	議会第200回のあゆみ
1975	昭和	50	5	31	～6/2　第16回さつき祭りが山崎小グランド、さつきセンター、郡園芸センター3会場で実施される。	神戸新聞西播のページS50.5.31
1975	昭和	50	6	14	小中学校の農繁休校各地で廃止される。	神戸新聞西播のページS50.6.14
1975	昭和	50	7	20	山崎町合併20周年記念式典が下村記念館で行われる。	神戸新聞姫路・西播のページS50.7.21
1975	昭和	50	8	19	町長選の任意制公共立会演説会が行われる。	神戸新聞西播のページS50.8.21
1975	昭和	50	9	8	台風17号の襲来で、床上浸水家屋164戸、河川の氾濫、田畑の流失、道路・橋梁の流失など大きな被害を受ける。	広報やまさきNo.275
1975	昭和	50	9	10	町議会議長に松下定吉氏を副議長に森岡貞夫氏が選任される。	議会第200回のあゆみ
1975	昭和	50	10		国勢調査が行われ、山崎町人口25，961人になる。	合併30周年やまさき
1975	昭和	50	10	16	中国自動車道が兵庫県内全線開通となる。	神戸新聞地域経済のページS50.10.6
1975	昭和	50	11	1	中国ハイウェーバス津山一大阪間が運行開始になる。	神戸新聞西播のページS50.1014
1975	昭和	50	11	1	山崎小学校創立100年誌が発行される。	山崎小学校100年誌
1976	昭和	51	1	1	授産施設さつき園が五十波に開設される。	広報やまさきNo.269
1976	昭和	51	2		『白球と共に五十年』の小冊子を下村憲一氏が発行する。	神戸新聞西播のページS51.2.26
1976	昭和	51	3	18	川戸の岩田神社で弓放しの行事が行われる。	神戸新聞西播のページS51.3.20
1976	昭和	51	3		耕耘機からトラクターへ農業機械が移行しだした(兼業農家の切替急増).	神戸新聞地域経済のページS51.3.29
1976	昭和	51	4	1	城東保育所の落成式が行われる。	山崎新聞第2171号
1976	昭和	51	4	5	最上山に森林公園が完成する(シンボル展望台完成)。	山崎新聞第2172号
1976	昭和	51	4	10	波賀町原から山崎インター経由新大阪行き高速バスが開通する。	神戸新聞西播のページS51.4.7
1976	昭和	51	4	20	最上山広場で森林総合利用促進事業として整備した森林公園の落成式が行われる。	広報やまさきNo.270
1976	昭和	51	5	9	大歳神社のフジまつりが行われる。	神戸新聞西播のページS51.5.11
1976	昭和	51	5	10	菅野幼稚園でスクールバスが運行される。	神戸新聞西播のページS51.5.10
1976	昭和	51	5	19	山崎町木材市場が創立15周年記念市を開く。	神戸新聞西播のページS51.5.21
1976	昭和	51	6	5	～7　第17回さつき祭りが須賀沢大谷広場と郡園芸センター(五十波)で行われる(人出は約20万人)。	広報やまさきNo.272
1976	昭和	51	9	7	～13　台風17号来襲、記録的豪雨で500戸以上家屋浸水等甚大な被害を受ける。	広報やまさきNo.275
1976	昭和	51	9	13	一宮町下三方で山津波発生する。	神戸新聞西播のページS51.9.14

明治以降の山崎の年表（16）　昭和49年～54年

西暦年	和歴	年	月	日	事　　項	出 典 等
1976	昭和	51	10		第146回議会で議長に松下定吉氏、副議長に香山実氏が選任される。	広報やまさきNo.276
1976	昭和	51	11		圃場整備事業にかかる山崎町比地遺跡発掘調査が始まる。	神戸新聞西播のページS51.9.3
1976	昭和	51	12	4	～5　第2回農業祭が農協会館で行われる。	広報やまさきNo.278
1976	昭和	51	12	25	山崎警察署新庁舎が今宿に完成する。	広報やまさきNo.277
1977	昭和	52	2	7	千本屋廃寺跡調査委員会を設置する。	神戸新聞西播のページS52.2.8
1977	昭和	52	2	25	千本屋廃寺跡発掘調査開始され鍬入式が行われる。	播磨千本屋廃寺跡
1977	昭和	52	3	18	千本屋廃寺跡で奈良時代の金堂跡見つかる(蓮華文の軒丸瓦など数千片掘り出す)。	神戸新聞西播のページS52.3.19
1977	昭和	52	3	22	青木銅鐸(考古資料)と同出土地(史跡)及び山崎八幡神社のモッコク(天然記念物)が県指定文化財になる。	しそうの文化財
1977	昭和	52	4	30	山崎町史完成し、発刊される。	山崎町史
1977	昭和	52	5		宍粟郡で初めての機能回復訓練室が郡民病院にできる。	広報やまさきNo.284
1977	昭和	52	5	15	町役場西駐車場で第1回朝市実施される。	広報やまさきNo.282
1977	昭和	52	6	4	～6　第18回さつき祭りが山崎小学校グランド、町立さつきセンター、郡園芸センターの3会場で行われる(人出21万人)	広報やまさきNo.284
1977	昭和	52	6		城西橋(山崎町段)が完成する。	広報やまさきNo.285
1977	昭和	52	7		城南地区でほ場整備事業はじまる。	広報やまさきNo.284
1977	昭和	52	9	27	第152回議会で議長に井上逸夫氏、副議長に西塚一義氏が選任される。	広報やまさきNo.286
1977	昭和	52	12	3	～4　第3回農業祭が農協会館で行われる。	広報やまさきNo.290
1978	昭和	53	1	21	宍粟郡広域消防事務組合の第1回議会が開催される。	庁内広報400号53.1.30発行
1978	昭和	53	2		千本屋廃寺跡発掘調査でミニ瓦が発見される。	広報やまさきNo.293
1978	昭和	53	3	17	金谷山部古墳(史跡)が県指定文化財になる。	しそうの文化財
1978	昭和	53	3	27	山崎小学校3教室増築工事の竣工式が行われる。	広報やまさきNo.293
1978	昭和	53	3	29	かしわの保育所が開所し、竣工式が行われる。	広報やまさきNo.293
1978	昭和	53	3	29	最上山に林業研修センターが完成する。	広報やまさきNo.293
1978	昭和	53	3		宍粟広域消防事務組合消防本部の開所式が行われる。	議会第200回のあゆみ
1978	昭和	53	4	14	山崎町議会だより創刊号が発行される。	議会だより山崎第1号
1978	昭和	53	5	12	さつき大橋完成し、竣工式と渡り初めが行われる。	広報やまさきNo.295
1978	昭和	53	6	3	～5　第19回さつき祭りが山崎小学校グランド、さつきセンター、郡園芸センターなどで行われる(人出15万人)。	広報やまさきNo.296
1978	昭和	53	6		マツクイムシの航空防除が始まる。	合併30周年やまさき
1978	昭和	53	8	26	山崎町児童合唱団が発足し，結団式が行われる。	広報やまさきNo.298
1978	昭和	53	8	26	河東小学校で増築(3教室)工事が完成し、竣工式が行われる。	広報やまさきNo.298
1978	昭和	53	8	30	第156回議会で議長に阪本敏雄氏、副議長に金井信次氏が選任される。	議会だより山崎第3号
1978	昭和	53	8	30	山崎幼稚園遊戯室増築工事が完成し、竣工式が行われる。	広報やまさきNo.298
1978	昭和	53	11	26	第1回秋の音楽祭が山崎小学校講堂で開催される。	広報やまさきNo.301
1978	昭和	53	12	10	土万基幹集落センターの落成式が行われる。	広報やまさきNo.302
1978	昭和	53	12	2	～3　第4回農業祭が農協会館で行われる。	広報やまさきNo.302
1978	昭和	53	12	10	さつき音頭、山崎小唄のレコード(歌手・西川峰子)販売開始される。	広報やまさきNo.302
1979	昭和	54	1	15	さつき音頭振り付け講習会が農協会館で行われ250人が踊りの練習をする。	広報やまさきNo.303
1979	昭和	54	3	21	都多小学校校舎の竣工式が行われる。	広報やまさきNo.305
1979	昭和	54	3	24	～25　第1回やまさき健康展が職業訓練センターで行われる。	広報やまさきNo.304
1979	昭和	54	4	7	勤労者体育センター(町民体育館)竣工式が行われる。	広報やまさきNo.305
1979	昭和	54	4	7	町民体育館落成記念招待バレーボール大会が行われる。	広報やまさきNo.305
1979	昭和	54	4	22	樽岡氏顕彰碑除幕式が行われる。	庁内広報463号54.4.16

山崎の美術の流れ（一）

伊藤一郎

今年から山崎美術協会が、宍粟美術協会へと名称が変わります。この機会に、分野ごとに過去を振り返りたいと思います。まずは今回絵画を、次回には書道・工芸と順次紹介いたします。

戦前から戦後にかけては、宍粟市からは、日本画の田之口青晃画伯が帝展・日展で活躍されました。鯉を描くと日本一と言われ、山崎小学校の校長室に鯉の日本画があります。また、愛知芸大日本学科教授で院展において活躍しておられる秦誠画伯の絵もあります。彼は私と同窓生で、山崎文化会館の緞帳（どんちょう）の下絵を制作しています。有名な方では、戦後朝日新聞の『氷壁』井上靖作の絵と『宗方姉妹』（大佛次郎）の挿絵の生沢朗画伯です。油彩画五十号「上海」が山崎中学校にあり、山崎小学校には二十号の水彩画があります。新潮会二十周年記念誌に生沢先生は、「子供の頃青蓮寺で遊んだ」と記述されています。思い出したのが、私の小学生の時に父に連れられて青蓮寺西側の居酒屋に行った時、父が「この店の二階に生沢先生が住んでおられた」と言い、店の方が、生沢先生の若い時に描かれた「女性の顔のスケッチ」を見せてくださった事を思い出しました。先生の遺作展は、西兵庫信用金庫六階大広間にて新潮会主宰で行われました。

昭和二十八年に、山崎町で初の展示会は山崎町本町通りにて開催され、主催は「八月会」で発起人は山崎高等学校美術担当の福井政雄先生です。参加者は、山崎高等学校から武蔵野美術学校に在籍されていた洋画科の松井叔生画伯や同窓生で神戸大学に在籍されていた福岡久蔵先生（油絵）と福岡先生の一級上級生の稲村美也子先生（油絵）・塚本龍夫先生（油絵）です。その他に、私の叔父で当時国鉄に勤めていた伊藤博夫のアザミ油絵が、展示会で売れたとのことです。宍粟市在住ではないですが、山崎の地獄谷へよく飲みに来られていた別所博資画伯がメンバーだったようです。別所先生の水彩画は市役所議会事務局会議室に二十号の今宿風景があり、山中医院の待合室には「十二波の鮎釣り」がありますので是非とも見ていただきたいと思います。私は、福井先生に山崎高校で、稲村先生には、合併前の山崎中で美術を教わりました。松井画伯は、小磯良平画伯に師事し、二紀展で活躍され、遺作展は、防災センターにて行われました。塚本先生は、現在八十七歳で絵画教室を大阪でなさっています。福岡先生は、山崎美術協会の発足に参加され現在会長として重責を負われています。伊藤親保も教師をしながら油絵を描き、新塊樹社展で受賞し、さらに昭和三十三年には山崎美術協会を設立し事務局長として参加しました。美術協会洋画部を率いたのが、中学校の教師になったばかりの福岡先生です。美術協会は、初代会長が小林善太郎に始まり、伊藤親保・小川登・福岡久蔵と続きます。松井画伯の二紀会には、現在山崎高校の美術を指導されている田中涼子先生が入っておられます。亡くなられた三渡弘さんが所属されていた現代美術家集団（東京都立美術館にて現美展開催）洋画部に所属されていた宍粟市の方は、田中武・伊藤一郎・高田清二・福井政雄・藤原義弘・白谷辰雄の面々です。

日本画については、現美より兵庫県ではトップクラスの、土肥武雄・渕上晁成のお二人が指導に来られました。出展者は、片山吉恵・志水松男・青柳又次・春名秀生・尾下勘二の方々です。でも残念ですが、現美展はなくなりました。

昭和三十五年には下村記念館が完成、色々な作品展が開催されました。昭和四十八年度には、福岡先生を中心に小中学校の先生方の洋画グループが立ちあがります。対抗して、いとう画廊に集まる若者でグループマッドを結成し、第一回の作品展は下村記念館で行い、現在百九回展まで進行しています。福岡先生は示現会に所属され、永く兵庫支部長をされていましたし日展にも入選されました。示現会に出展されていたのが、志賀納さんで一枚の絵で銀賞を受賞され、一枚の絵専属画家になっておられます。山崎美術協会副会長の藤原先生も永く示現会展に出されていました。現在は、多田多恵美さんが出展されています。昭和四十四年に、さつき祭りの協賛事業として、山崎美術協会展が開催されました。平成三十年に五十回記念展を開催し、昨年五十一回展で幕を閉じ、今年より宍粟美術協会展となる予定でしたが、コロナ禍で延期となっています。

昨年度に四十四回目の宍粟美術展を行っていますが、当初は県民ギャラリー展として神戸での開催でした。会期後に、宍粟市内を巡回する形で展示を行っていました。翌年度からは、この作品展と山崎美術協会展を統一することになります。

現在の絵画事情は、洋画では波賀町の保杉弘先生指導のグループと白日会所属・日展連続七回入選の志水和司先生が教室をされています。また、いとう画廊絵画教室もクラブ・ピカソとして絵画研究会を開催しています。会長は多田多恵美さんで指導は志賀納・伊藤一郎です。以前には柳田勝さんの絵画教室があり、現在の山崎美術協会洋画部の寺本三枝子事務局長・西江美恵子会計が所属されていました。日本画では、日展作家の青田先生の教室から丸井豊子・三浦行子・山下悟各美協理事と、日展作家の宮崎先生の弟子で片山吉恵教室からは湊百合代美協理事らが参加されています。水墨画では過去に、横江柏峰先生がおられました。私が二十代の頃に東京都立美術館で現美展に出品していた頃、他の団体の中に水墨の団体があり、横江先生の作品を発見したときは感激しました。また、示現会展の中で福岡先生の作品を見つけたときは大変うれしかった思い出があります。いとう画廊日本画教室の指導は、兵庫県日本画連盟事務局長の松下邦夫先生で、一番弟子が前田寿美枝さんです。私の母も日本画連盟の会員でした。私は松下先生の絵がとても好きです。なんとか近づきたいと日々日本画に挑戦しています。私の知る範囲での記述なので、名前漏れ許していただきたいと思います。

生沢　朗作　　「上　海」

福原謙七と『論語』

もう一つの読み方

鎌田裕明

令和元年十二月、新型コロナウイルスの発生が報じられ一ヶ月後にはパンデミックが全地球的規模で波及し、七月はじめには感染者は一千万人を越えました。人類は生活文化をはじめ保健、経済、政治等の全ての領域で耐えがたい苦難を強いられており、私たちは、全く未経験な得体の知れない不安な日々を送っています。

感染病史上、現代では最も凶悪なＣＯＶＩＤ－19はグローバル化した世界のネットワークに乗って拡散を続けています。このような状況下、小論では、自粛生活のなかで、慌ただしく、しかもある種の緊張感のもと、世界最高の古典といわれる『論語』を読み、同時に、福原謙七が明治六年、三十二歳の時に出版した『重校改正刪定四書』注①に含まれる『論語』を併読して明治維新後、教育と行政の官僚、そして政治家として活躍した謙七の人間力と知の深さの根源にも迫りたい。それは未知なものに触れる心のときめきをもたらしてくれると思うのです。

なお『論語』の解釈と読み方については、古注派（魏の何晏（かあん）・後漢の鄭玄（じょうげん）など言語学的解釈を中心とする学派）と、新注派（南宋の朱熹をはじめ哲学的解釈を中心とする学派）の学者達の名著をはじめ、伊藤仁斎、荻生徂徠などの名作がありますが、吉川幸次郎、吉田賢抗、金谷治、桑原武夫、加地伸行、井波律子など碩学の著書に依りました。

はじめに、『論語』と福原謙七について説明をしておきます。

『論語』は孔子の死後、弟子が師の言行を編集したものです。無味乾燥な教訓の書と思っている人たちも多いが、熟読玩味すると、心を揺り動かす迫力と面白さに富む書です注②。孔子（前五五一～前四七九）は中国の春秋時代末期の思想家、儒学の祖と言われる。はじめ政治家を志し、果たせず、晩年は弟子の教育に専念した。

福原謙七（一八四一～一九二四、以下謙七と記す）については既に多く紹介してきました注③ので本論に係る範囲に限って記します。山崎の米穀商の家に生まれ、一五歳頃に大阪で、次いで丹波、そして備中で当時では第一級の儒学者に学び二九歳で、山崎藩校教授、次いで飾磨県学区取締、揖東郡長、印南郡長を歴任。明治一七年には山崎に「靖献義塾」を設立、国政レベルでは明治三二年帝国党兵庫県代表を務め、内務大臣品川弥二郎や、文部大臣大木喬任とも親交がありました。

一「麒麟がくる」、寺子屋の学びに『論語』

ＮＨＫの大河ドラマは制作費もダントツで、毎年話題に富み、時代の課題に応える話の展開が図られていることで定評があります。令和二年五月二四日放映分に、明智十兵衛光秀が不遇な青春の時代、村の子ども達に論語を唱和させる場面があり、十歳前後の子どもの勢いのある声はドラマに清冽な印象とさわやかな充実をもたらしていました。憲問第一四篇三二章の次の文です。

子曰、不患人之不己知。患己無能也。（子曰く、人の己を知らざるをうれえず。己の能なきをうれう。）

〈意味〉、老先生の教え。人が自分を知ってくれないことを気にかけない。自分に才能がないことを気にかけることだ。他人の目より自分が自分自身をどう見るか、が大切と説いています。

この三二章はドラマのなかで、経学の教養を身につけ、近隣大名の領国支配の実情などに優れた知見を持った光秀の鬱屈した心象風景を映像化するのに使われていると思うのです。

二「逝くものは斯くのごときか・・・」二つの解釈

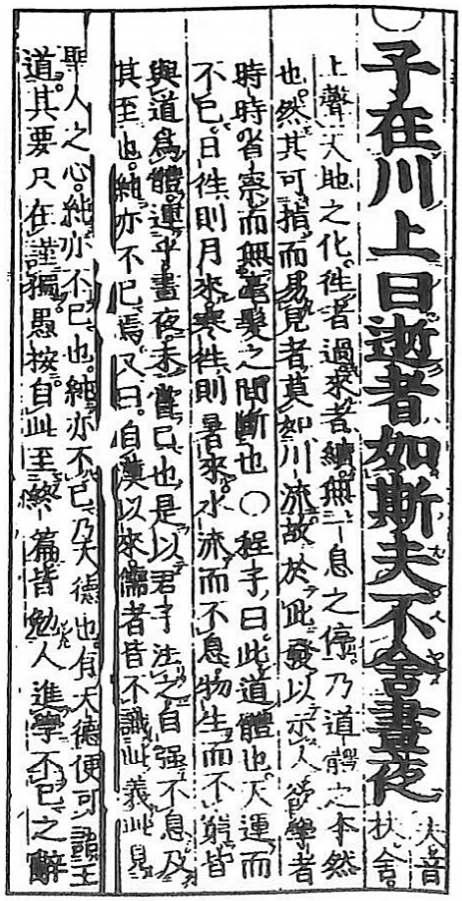
次に紹介するのは子罕第九篇一七章、別名「川上の嘆」といわれて有名です。私は初めてこの章に出会った時、「ゆく川の流れは絶えずして・・・」の鴨長明の「方丈記」を想起したことでした。

この章の解釈をめぐって、二つの考えがあり、それはまさに論者の生きた時代と深く関係があります。古注派は魏、後漢の時代に、新注派は南宋に属します。原文と解釈を見てみましょう。

子在川上曰、逝者如斯夫。不舍昼夜。（子、川のほとりに在りて曰く、逝く者は斯くのごときか。昼夜をやめず。）

〈意味〉老先生の川のほとりでの教え。「川の流れと過ぎゆくものは同じなのだなあ、昼も夜も一刻も止まらない」注④、人間も歴史も自然も時と共に移ろってやまぬと嘆じています。この解釈に対して朱熹は下段の写真資料のように述べています。即ち、天地の変化、往くもの、来るものは一息も止むことのないのは、水の流れが止まらないのと同じ。この無限の天地の発展・持続のなかで人も同じく絶えず発展していく。学者はこの理を悟り、時時に省察し、間断なく努力すべきである。

謙七は師とする朱熹のこの注釈をうけて、次のように述べています。「愚按（私が考えるに）注⑤ずるに、子罕篇のこの章以降は、みな、学に進み、止まず勉めたる人のことを書いている」と。これは不断に推移する時間のなかで人びとの幸せが失われ、死んでいく、という古注派の世界観でなく、官僚制の集権国家としての安定と希望が広がった南宋時代のエートス（精神的雰囲気）から来るものです。謙七が山崎闇斎を経て、朱熹を継いでいたことが分かります。同時にこの章は、謙七の修業時代を始め少壮官僚として西播磨で活躍していく心の支えであったようにも思われるのです。


子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜（夫音扶舍）
上聲天地之化往者過來者續無一息之停乃道體之本然也然其可指而易見者莫如川流故於此發以示人學者時時省察而無毫髮之間斷也○程子曰此道體也天運而不已日往則月來寒往則暑來水流而不息物生而不窮皆與道爲體運乎晝夜未嘗已也是以君子法之自强不息及其至也純亦不已焉又曰自漢以來儒者皆不識此義此息聖人之心純亦不已也純亦不已乃天德也有天德便可語王道其要只在謹獨愚按自此至篇皆勉人進學不已之辭

謙七の『論語』原本の１４丁

なお、私はこの一七章の川についての考証や議論も内容の理解のために大切だと思います。日本で言うとどんな川だろうか、揖保川の十二波を雨の少ない八月頃流れる川のたたずまいに近いのか、一日で百ミリを超す大雨後の濁流なのか、想像を止めどなく膨らませながら楽しむ、そんな『論語』の読み方もあるのかと思います。

三　一箪の食、一瓢の飲（いったんのし、いっぴょうのいん）

ワーズワースの「生活は質素に、志しは高く」、土光敏夫経団連

元会長の「めざしと味噌汁の食事」を想起させる雍也第六篇一一章です。孔子の弟子顔回（以下、回と記す）は孔子より三十歳年少。姓は顔、名は回。孔子の最も大事な弟子でした。この顔回を賞賛する美しい文章です。

子曰、賢哉回也。一箪食、一瓢飲、在陋巷。人不耐其憂。回也不改其楽。賢哉回也。（子曰く、賢なるかな回や。一箪の食《いったんのし》、一瓢の飲《一ぴょうのいん》、陋巷《ろうこう》にあり。人は其の憂いに耐えず。回や其の楽しみを改めず。賢なるかな回や。）

老先生が言われた。「偉いものだ、回は。竹のわりご一杯の飯とひさごのお椀一杯の飲み物で、狭い路地の暮らしだ。多くの人はつらさに耐えられないだろうが、回は自分の楽しみを改めようとしない。えらいものだ、回は。」注⑥

謙七はこの一一章の解説で、回の「楽しみ」が「箪瓢陋巷」でなく「道を学んで楽しむ暮らし」ということを朱子の記述に従って述べ、「愚按（私が考えるに）」として「回の楽しみについて深く思い、意味を自得する」ことと「博文約礼の教えを習得すること」を強く願うと後学の人への熱い思いを記しています。私は謙七の大阪、丹波、備中での厳しい学びの時代の精神的支柱が、将にこの一一章ではなかったか、と謙七への畏敬の念をさらに強めたことでした。

なお、「一箪の食、一瓢の飲」は『現代兵庫県人物史』（田住豊四郎）の福原謙七の青春時代を記す箇所で用いられています。謙七が田住氏の取材に応えて、語ったのでしょうか。

注

① 福原謙七『重校改正刪定四書』堺の書籍商高槻平治郎から出版、明治六（一八七三）年、朱熹著、点者福原謙七。この中には勿論『論語』全文が含まれています。

② 吉川幸次郎『論語』、桑原武夫『論語』、井波律子『論語入門』、貝塚茂樹『論語』など特におもしろい。

③ 『やまさき文化』３８号、『山崎郷土会報』１３０、１３１号に鎌田裕明、髙井淳、堀口真吾、松下宣夫、下多謙一など『山崎闇斎研究会』会員の報告が掲載されています。

④ 桑原武夫『論語』筑摩書房２００６年版２１６頁、この章は古注派の観点で書かれています。

⑤ 謙七の意見は「愚按」「愚謂」として『論語』５００章中の二〇章ほどに出ています。これを見つけるのが楽しみなのです。

⑥ 金谷治『論語』岩波文庫２００２年版１１２頁

終わりに　三つの章句の読み込みや説明は適切であったか、思えば忸怩たるものがあります。これ以外に吉川幸次郎や井波律子氏の絶賛する章句のご紹介ができなかったことが残念です。『山崎闇斎研究会』で小稿のスタイルでの講読を予定しています。次の機会には謙七の『論語』を含めいい報告が出来れば、と楽しみです。

驚いたことは、読み手の世界観によって別の解釈があり得たり、文字や構文理解に異説があること。これは二千年を超す『論語』の歴史の厚さの故なのでしょうか。

いつもながら、大谷司郎郷土研究会長、片山昭悟会報部長には格段のご支援を頂きました記して感謝申し上げます。

広瀬宇野氏滅亡後の宍粟

竹内克司

宇野氏は室町期から中世・戦国時代を通じて赤松氏のナンバー2として宍粟郡広瀬（山崎）にあり約二〇〇年余りの間、播磨守護代と西播磨八郡の守護代を勤め宍粟郡を統治している。最後の当主宇野祐清のとき羽柴秀吉軍により、立て籠る長水城を落とされ、千種町で追手の木下平太輔（荒木重堅）、蜂須賀小六・家政父子により討ち果たされた。今から四四〇年前の天正八年（一五八〇）五月十日の事である。

ここでは宇野氏の滅亡後の天正八年から元和元年（一六一五）の三十五年間の宍粟郡の戦後処理と新領主とその動き等について郷土資料集第二集をもとに、年次順にとりあげた。

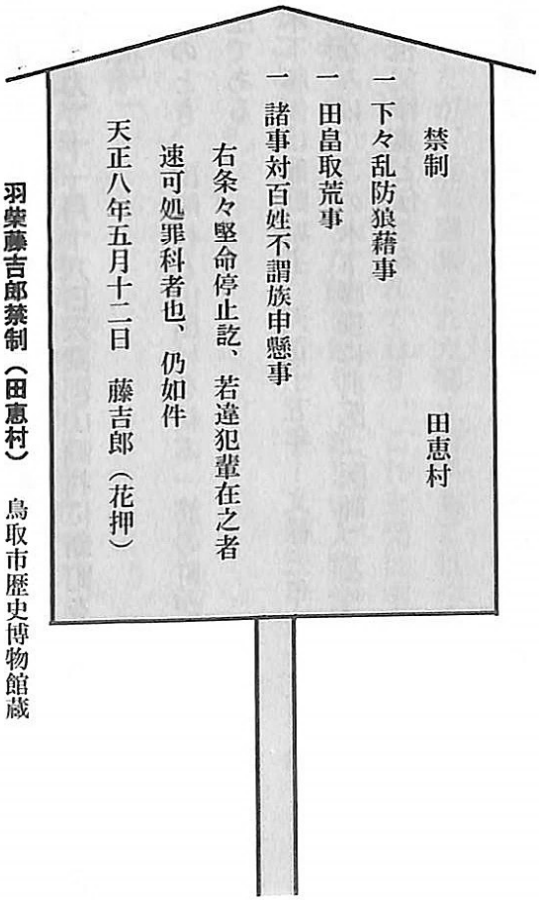
▼天正八年（一五八〇）五月十二日長水城大手に当たる田恵村に禁制が掲示される

長水城落城の二日後禁制が掲げられた。その場所は長水城の大手で現在の山崎町宇野字構の伊水小学校の地。禁制（※1）の旧蔵者は山崎町宇野直近の居住者であることから、現在の宇野は田恵村（※2）であったと考えられる。従来はその読みから山崎町田井村と誤認されていた。

なお、平成二十四年伊水小学校の背後の宇野構の県の発掘調査で、規模の大きな石垣が発見されたが、それは長水城落城後のものとする調査結果が出ている。落城後の秀吉の時代に、長水城の山麓周辺に新しい町場が形成されたようで、上町（かみまち・かんまち）、中町、下町の地名が残され、現在下町が自治会名として継承されている。ちなみに上町が明治になって、長水城主宇野氏にちなんで宇野の地名が生まれている。

※1　禁制は、村落、寺社などが軍隊の乱暴から免れるため、支配者の武将に願い出て金銭等の代価を支払い下付された。

※2田恵村　このまま「たえむら」と呼ばず、「たいえ」と呼べば和名類聚抄の高家郷に比定できる。もしくは田以恵の以の字の脱落か。長水城の大手には高家荘という中世の公家・万里小路（までのこうじ）家領の館があった。高家とは高家里（郷）のことで、都多（太）川（伊沢川）の河口の庄能（塩村）以北の伊沢川流域を指している。



羽柴藤吉郎禁制（田恵村）　鳥取市歴史博物館蔵

▼天正十一年（一五八三）宍粟郡広瀬城に神子田半左衛門正治配置

賤ケ岳合戦（※3）の所領配置により、宍粟郡広瀬城（篠ノ丸城カ）に神子田半左衛門正治が配置された。（『秀吉事記』）内容は前代を踏襲しているため、神子田氏は宇野氏のあと天正八年より宍粟領を有していたと考えられる。

※3　賤ケ岳合戦は、天正十一年（一五八三）近江国伊香郡（滋賀県長浜市）の賤ケ岳付近で起きた羽柴秀吉と柴田勝家の戦い。

▼天正十二年（一五八四）神子田半左衛門正治改易

「長久手戦話」に、「中国出、太閤黄母衣衆、後播州広瀬領主　改易　神子田半左衛門」とある。広瀬領主神子田正治は小牧・長久手合戦で無断戦線離脱を咎められ、改易された。

翌年の天正十三年八月十三日付「羽柴秀吉朱印状」には秀吉は脇坂安治（※4）に、神子田正治とその妻、縁者を決してかくまうことのないよう厳命している。

※4　脇坂安治は、賤ヶ岳の七本槍の一人。淡路国洲本藩主、伊予国大洲藩初代藩主。龍野藩脇坂家初代

▼同年七月十八日黒田官兵衛孝高、羽柴秀吉より宍粟郡一職を与えられる　（「黒田家文書」）

▼天正十五年（一五八七）七月三日　黒田勘解由（黒田官兵衛孝高）豊前国へ移封　（「豊臣秀吉領知朱印状写」『黒田家譜』）

▼同年木下勝俊が宍粟郡を支配下に置く。

（同年カ）十一月十六日宍粟郡山崎村に新町を開設す　（「木下勝俊書状」）

このとき、山崎村と山田村を結ぶ一筋の町が生まれた。山崎町の誕生である。

木下勝俊は龍野城主　天正十五年～文禄三年（一五九八）

ちなみに、この木下勝俊に典医（医師）として仕えたのが山崎闇斎の祖父浄泉と伝わる。

▼慶長五年（一六〇〇）宍粟・佐用・赤穂の三郡が宇喜多氏の支配下となる。

広瀬に宍甘太郎右衛門、牧藤左衛門家信が在番（「宇喜多秀家書状写」「沼元文書」『久世町史』資料編1編年史料）

▼慶長期（一五九六～一六一五）宇野祐清の子「山崎基久」黒田家に仕える

黒田家中には祐清の子山崎基久以下、小林久重・常屋正友・船曳近正・新免宗貫とその子宗重等、宇野一族・家臣も仕官している。ちなみに山崎茂右衛門基久一五〇石、新免宗貫二、〇〇〇石、同宗重三〇〇石、同右兵衛三〇〇石とある。（「慶長年中士中寺社知行書附」『黒田三藩分限帳』）

ここで特筆すべきことは、宇野当主祐清の血を引いた末裔の存在が確かめられたことである。山崎家が所持する系図に、宇野家臣小

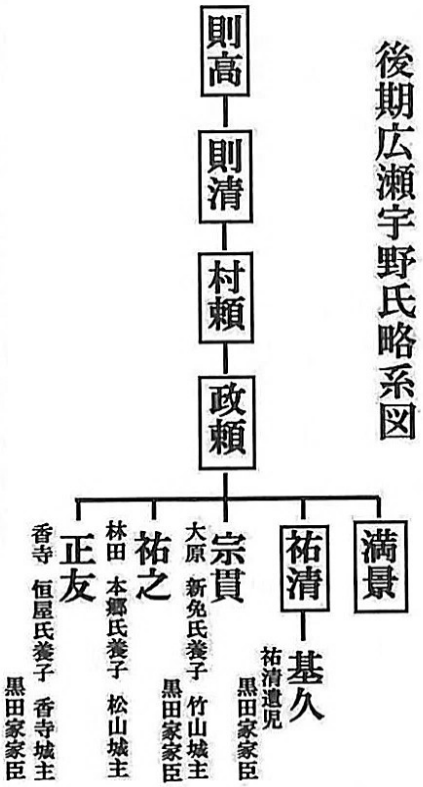
林氏に守られて筑前に行く途中、祐清の妻が男子を生んだとあり、それが山崎茂右衛門基久とある。さらに系図には祐清の妻は高砂城主梶原駿河守景則ノ女とあり、黒田分限帳には梶原弥次兵衛　景鎮、駿河守景則孫と記されている。

ただし、三木城合戦のとき、三木城への兵糧の供給基地であった高砂城の城主は梶原平三郎景行とされ（『高砂町史』）、系図内容については検討を要する。

次に三男宗貫は、美作（美作市大原町）竹山城主であり、宇喜多秀家の没落後、黒田家に仕えている。

さらに、四男正友は、播磨（香寺町）恒屋城主で、秀吉軍に落とされたものの、これもまた黒田家に名を連ねている。

戦いにからくも生き延びた宇野一族が、筑前の黒田家に仕え、その末裔が今に続いていることは驚きであり、敵味方に関わらず被官を許した黒田家の懐の深さも知ることになった。



宍粟の武将宇野氏を語り継ぐために

江戸時代の町年寄であった片岡醇徳が記した名著『播州宍粟郡守礼交代記』元禄十二年（一六九九）には、宇野氏をして「或る人の曰く、（中略）固滞にして変通の機を知らざりし将と聞こえし。」と記す。片岡醇徳は、「或る人」の弁として宇野氏は播磨西部の山間僻地にして世の変化に適応できなかった残念な武将であると、辛辣な評価をしている。本当にそうであったのだろうか。

宇野一族は、室町期以来戦国期末期まで赤松一門として二百余年にわたる宍粟郡の領民統治能力や功績を問わずして、敗戦・没落の因となった二大勢力の毛利方につくか織田方につくかの選択能力の無さで烙印を押されたのでは浮かばれない。

従来中世・戦国期における宍粟の武将宇野氏の歴史は、長水城・篠ノ丸城の落城ですべてが闇に葬られ、空白の中世・戦国史を思わせていたが、近年編集された郷土資料集には宇野氏に関する史料が余すところなく収集されており、これを元に宇野氏が激動の世に宍粟に根を張って生きた証を知り、新しい人物像として広く語り継がれることを願うばかりである。

参考図書
『播磨国宍粟郡広瀬宇野氏の史料と研究』）（宍粟市教育委員会平成二十六年発行）」

山崎婦人会発足の歴史と現在

三渡　眞由美

婦人会が健在であった二十年近く前、家庭から排出される多量のゴミが環境や健康へ与える悪影響を学び、処理場見学を通じゴミ分別の徹底を課題にして、その啓発活動を推進しました。またマイバック運動の交渉にイオンに何度か走り、防災では各自治会の井戸や消火栓確認調査をするなど、現在でも取組む必要のある活動を試行錯誤していたころ、私は「山崎婦人会の発足の元」の資料だという『山崎校（小学校）家庭会、公益財団記録』のコピー資料をいただきました。その内容を一読した時、婦人会活動がどうあるべきかが鮮明に見えたように思ったことが蘇りました。

今回、大正九年（一九二〇）に発足して今年で丁度百年を迎えますこの「山崎校家庭会」の紹介をさせていただきます。

「山崎校家庭会」という組織の発足動機は、当時の世相でもありますが「教育の不振と環境の不良を改善することと、従来少しも着手することができない婦人の革新を促さんと決心し」、後述する趣意書を以って呼びかけられ、七百四十六名の会員が集まり、大正九年六月十三日成立しました。

当時婦人の団体としては、上流階級婦人のサロン的な意味合いが大きかった愛国婦人会がありましたが、庶民の婦人団体としては、滋賀県蒲生郡八幡町と当山崎町の二か所のみといわれ、富山県、愛知県、高知県、山梨県、大分県、千葉県、遠くは青森県、鹿児島県等々各地から、問合せが殺到したようで、「詳細を知りたしと照会するもの多し」と記されています。

また、山崎校家庭会・公益財団の設立にあたっては、大正七年宍粟郡青年団幹部講習会において、法学士山下信義氏の公益財団、家産財団の講話を聴いた山崎小学校長岸原徳四郎氏が、八年、九年と講話を聴き、その必要性を唱え、大正九年九月二十五日に本町北門支店で家産財団期成同盟会の創立総会を挙げています。当時教育の振興策を考慮しつつあった折、公益財団の設立が山崎校家庭会の事業として最も適切であると感じ、翌十年一月十日、山崎尋常高等小学校において山崎校家庭会総会で公益財団設立の協議を経て、同日設立されました。

次に、「山崎校家庭会発足趣意書」、及び「公益財団設立趣意書」に掲げられている要点を記します。

・「子ども程大切なものが他にありましょうか。また、いかに自分の子どもだけ良く育てたとしても周りが良くなければ自分の子どもたちまで良くならないでしょう、今はこの大切な貴い育英のことに心から協力覚醒する時と考えます。」

・「最愛の児や孫に美田財宝を遺すより十分な教育を施そうと願いますのは親の情でありますが、義務教育すら思い通りに受けさせ得ない者が少なくない。どう云う事でしょうか。秀才でありながら家庭の事情で涙をのんでいる者が多々あります。これはダイヤモンドをチリの中に埋めておくに等しい。これを十分に救助しその志を得させ、一段と教育の進歩を来させようということは今日の処では望んで得られないような状態であります。手を拱いてこれを停観して

いましては将来何時の代において望みを達し得られましょうか。私共微力でありますが前途を考慮し最善の方法であると信じ、別記家庭会公益財団設立を計る所以であります。」

・「一、上級学校勉学資金の給与　二、秀才養成資金の給与　三、児童学用品の給与　四、児童昼食の給与　五、児童病傷治療　六、児童浴場常設　七、八（略）　九、児童父兄の救済・・・」

とうたっています。そしてその財源は、寄付行為をもって百年の計画で財団を設立すべく、婦人たちの入会を呼びかけています。

大正九年六月十三日、家庭会発足から百年、趣意書に書かれた内容は、時代背景は大きく変わったものの、昨今、子ども食堂等々新聞紙上を賑わしています子どもの貧困、貧困からおこる様々な問題など、今まさに取り組まなければならない課題と重なります。

大正時代にこの地の婦人が、このように問題意識を持って組織を作り、行動に移した見識の高さと実行力のパワーに驚かざるを得ません。そして婦人会の起源となった子どもにまつわる、家庭会発足の趣意書を読むにつけ、ある意味〝婦人（女性）の持つ感覚・感性がいかに的確である事か〟が伺い知れるのではないかと思うのです。

この山崎尋常高等小学校家庭会が山崎婦人会の起源であり、その後の婦人会活動が地域の子どもたちとともにあり、その代々の活動資料が現山崎小学校に保管され続けてきたことは、学校と婦人会のつながりが深かった証しだと思います。

当時の会員が五銭、十銭と浄財を積み立て、困っている児童を救済すること。それが地域を、引いては自分達の子や孫にも良い環境をつくると信じ、百年の計を立て実行した婦人達が、この山崎に多数いた事実に感銘を受けます。途中、太平洋戦争の国体に巻き込まれながらも、戦後ふたたび、子どもたちや地域へと目を移し、生活改善に取組み、延々と積み立てを続けた婦人会の活動に崇敬の念すら感じます。

近代日本の中で庶民の婦人の団体が誕生した事は、当時の日本においては極めて珍しく、それはこの宍粟の輝かしい、誇らしい婦人の歴史であると思うのです。

時代を先取りしながらの活動も九十年の時を経て、諸々の事情で解散となり、大変残念に思いますが、新型感染症、地震・洪水災害と目の前にせまる大小の災害に、子どもといわず老若男女大きな問題が降りかかっている現在、人口の半分を占める女性が再び立ち上がる時がきているのではないかと感じています。

宍粟には賢明な女性がまだまだ多くの活動をしております。また何時の日か一致団結して地域のために力を発揮するであろう事を確信し、また期待しているこの頃です。

追記、こうして薄識の私が婦人会の発足趣旨を、拙い文面ながらご紹介できる機会を与えてくださり、ありがとうございました。心より御礼申し上げます。

参考文献

・山崎校家庭会公益財団記録

・『家産より富と人生との関係へ』山下信義著(大正十一年)

「山崎歴史郷土館」（五）

河本雅視

山崎町の歴史（安土桃山時代～江戸時代前期）

第五回目の今回は、長水城・篠の丸城落城後の山崎町の町並みが出来た歴史を、郷土館展示物と町史をもとに紹介します。

はじめに

長水城・篠の丸城、両城落城の頃はどのような世の中であったのでしょうか。

天正八年（一五八〇）両城落城後、宍粟郡は、神子田半左衛門の領地となりました。しかし半左衛門は後、小牧長久手の戦いで失敗し、秀吉に追放されています。

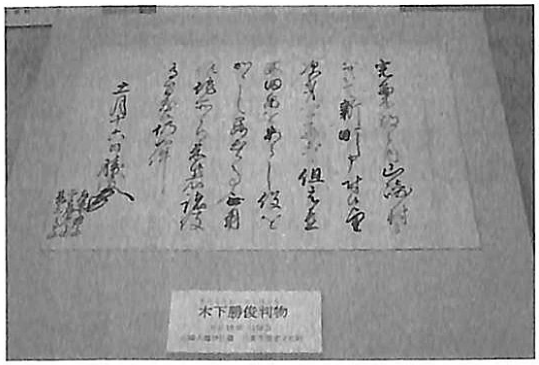
当時、中央では、天正十年（一五八二）明智光秀が本能寺に織田信長を襲い自殺させるという本能寺の変があり、また、秀吉が毛利輝元と和睦を結んで帰京し、京都の山崎の合戦で明智光秀を討つという激変の頃でした。そして間もなく秀吉の時代となりました。翌天正十一年（一五八三）に秀吉が大坂城を築いています。

宍粟郡は天正十二年（一五八四）、秀吉により、神子田半左衛門を追放し、黒田官兵衛に与えられました。そして、官兵衛はその領主となり、宍粟を支配するところとなりました。しかし、官兵衛は秀吉の側近として九州征討等に参加して山崎に落ち着くこともなく、天正十五年（一五八七）九州征討が終わると豊前中津に移封されました。そのため、同年宍粟郡は龍野城主木下勝俊の支配を受けることになり、この時期から山崎が町としての発展を見ることになります。

一、木下勝俊の時代（一五八七～一六〇〇）

木下勝俊は、当時の姫路城主木下家定の長男ですが、龍野六万四千石の城主でした。

木下家は、杉原家定の妹「ねね」が木下藤吉郎（後の豊臣秀吉）に嫁ぎ、「北の政所」となりました。そのため「ねね」の実家が木下姓を名乗ることを許され、杉原家定も勝俊も木下姓となりました。



新町申付書（山崎八幡神社文書）

宍粟郡を領した木下勝俊は山崎町に新町を申し付ける下知状を出して村を町に発展させました。その時の下知状（判物）が郷土館に『山崎八幡神社文書』として保存され展示されています。

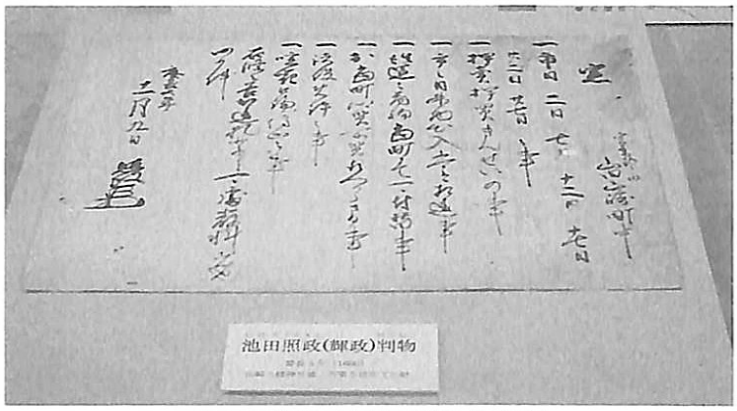
その下知状の文意は、町史によると【山崎に新町をつくるから新町に移り住みたいものは、誰でも住んでよい。ただ、村での自分の田畑の耕作者が欠けて荒れてしまうようではいけない。他所から移住したものには、諸役は課さない】とあります。

また、町史には「この当時の山崎は篠の丸山の南麓に、東は山田村、西は山崎村というふたつの農村があった。これが勝俊領のとき、

郡の中心地と認定して、町並みに家作りをさせて初めて山田町・山崎町を一筋とする新町が出来た」とあります。

二、池田輝政の時代（一六〇〇～一六一三）

池田輝政は、慶長五年（一六〇〇）に天下分け目の戦い「関ヶ原合戦」がありましたが、その時の功によって、姫路城主となって播磨五二万石の領主となりました。そして、宍粟郡は池田領となり、郡の代官として中村主殿助（とものすけ）正勝が任命されています。その時、輝政は同年十一月九日付で山崎に市日許可書の判物を公布



市日の定書（山崎八幡神社文書）

宍粟郡之内　山田山崎町中

定

一、市日　二日　七日　十二日　十七日
　　廿二日　廿七日之事
一、押売押買きんせいの事
一、市之日　升物出入不可有相違事
一、往還之荷物　当町にて可付替事
一、於当町　郷質所質取へからさる事
一、諸役免許之事
一、喧嘩口論停止之事
右条々若於　違反之輩者可処厳科者也
仍如　件
慶長五年
十一月九日　　照政（花押）

しています。

この判物文書も『山崎八幡神社文書』として保存され、現在勝俊の新町申付書と並列して郷土館に展示されています。

この判物文書は勝俊によって出来た新町に、市の日の定めや、取引の時の注意点などが記されています。

これら二つの判物によって、現山崎町商店街に多くの人が住み着き、町並みが出来ました。

また、この時代は既に、物の流通も、鎌倉時代中期から渡来した宋銭により、現物納から銭納に代わり、商業活動が活発になって来た時代であり、龍野城主の木下勝俊の、新町申付書により、他地方からも有力な商人達（龍野屋・英賀屋など）も来町し、また、地元の長水城山麓の上町・中町・下町の商工業者も移り住み、一筋の町が出来たようです。

そののち池田輝政が播磨五二万石の姫路城主になり、山崎に上記の市日許可書の公布により町も賑わい、一方農業生産も高まり、自給自足の生活から余剰生産物を売るようになり、更には商品作物の栽培、手工業品の生産活動も行われ、物流も盛んになってきたと思われます。しかし、この頃までは領主は龍野領主の領土であり、また、その後、姫路城主の領土でありましたので、山崎を中心とした政策はとられていなかったと思われます。

しかし、その後元和元年（一六一五）池田輝政の四男池田輝澄が宍粟三万八千石の領主として入封します。初めて宍粟藩として独立し、大きく発展していきます。

空中写真と地図（その４）

清水　哲

一　峠道

（一）今から十数年前に『三日月町史　第三巻近世』を宍粟市立図書館で借りて読んだ。三日月藩の藩主や領内農村など基本的な説明は、山崎町青木の山内家文書を参考にしており気になっていた。一昨年秋に偶然の幸運に恵まれ、山内家の『明治四年　御地頭　森様御領内村名書控帳　辛未九月吉』という文書のコピーを頂いた。

この文書に書かれていることは。①歴代藩主名、②藩士名一覧、③三日月藩領の村名（当時の宍粟郡からは青木村を含め一八カ村）、④附録として幕末・明治初期の有名な出来事や藩主の動静、である。

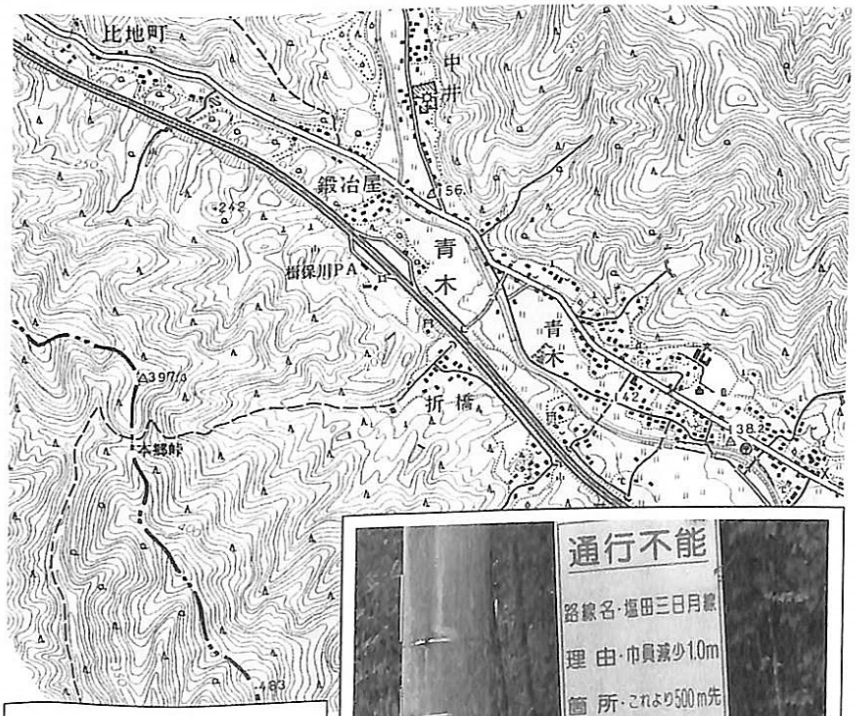
『山崎町史』には、高下の庄氏が、奥州出陣に藩医として随行した山内謙道氏が無事帰った報せに喜んだことが記されている。

（二）この山内謙道氏の文書に「本ぬ」（ほんたわ）という言葉が二回出てくる。Ａ．明治七年十月に最後の藩主俊滋が東京から三日月に来た際に、廿七日に青木村を訪れ同日晩に「本ぬ暮れにてお帰り遊ばされ、謙道岡の奥まで御送り申しあげ候」と。

Ｂ．最後の方で書かれているのは「明治元年正月廿五日、雲州殿様以下千二百人が本ぬより通り、佐用御泊、三日月で御昼、安志泊で上京、本往来は浪士で危険なので丹波路を通った」と。

「本ぬ」とは何か。千種と波賀の間に鳥ケぬ（たわ）という峠があるが…と困っていた時、青木在住の河本雅視氏とイオンで偶然出会い尋ねてみると、青木から旧三日月町へ越える「ホンダワ」ではないか、小学生の時峠まで遠足で行ったとのこと。後日青木に行き地元の人に教えてもらい、縦貫道をくぐって折橋集落で尋ねるとやはり「ホンダワ」とのこと。峠の向こうの本郷村も同じ三日月藩領であり話は合う。左図の本郷峠を「ホンダワ」というのであろう。Ｂの文章では、なぜこの順路になったか研究を要する。

「ぬ」（タワ）とは山のへこんだ所・鞍部、垰や撓の字もある。地理院電子国土を拡大すると千種町に ぬのついた地名がみられる。



写真①　折橋から西に登ると「本郷峠」とあり、南に下ると旧三日月町の本郷地区に行く。「山崎町全図」平成１５年

写真②　折橋から奥に進むと、「通行不能」の看板、さらに奥には防獣柵で行き止まり。

二　山道

（一）「ぽつんと一軒家」という番組で東京都と山梨県の境にある古甲州街道を映していた。戦国時代まで重要な道だったらしいが狭い山道だ。人馬が歩くことが中心の時代にはそれで良かったのだろう。

（二）険しく突き出た崖を岨（ホキ）という。川の浸食する力に負けず蛇行させる所にこのような岨があり、『山崎町史』では、新宮町平見との境の「比地が岨」と野々上・杉ケ瀬間の「釜ケ岨」をとりあげている。与位と田井の間もまさに険しい崖であり、江戸時代に岩に穴を穿ちそこに杭を差し込み、板を掛け橋のようにして人や牛が通行したそうだ。対岸の杉ケ瀬からみるとその穴は今のトンネル道より低く、あれでは洪水の度に杭と板が流れたと思われる。明治三十年代に洞門が出来たそうだ。

だがしかし、板橋がまだ無い時やそれが流失した時はどうしたのか。田井・杉ケ瀬間の渡し船に加えて木ノ谷・与位（又は清野）間の渡しがあればだが、それも難しい場合は与位・田井間の山越えしかないと思う。前回掲載した明治30年測量・32年製版の地図では、今のトンネル付近で山越えの「小径」が破線で書かれている。現在のような平たい広い道の無い時代には。人々は山道をさほど苦にしなかったはずだ。

二年前の会報一三二号の論考23頁で片山昭悟氏が、金谷から「山崎への通り道は、江戸時代には亀ケ尾の尾根上を通り、段、山崎へ歩いて行っていたことを聞いたことがある」と書いている。古老もまた先人から大事な年貢米の運搬ルートと聞いたのだろう。地形的にみても湿地帯をさけて安定した山道を使ったと思う。

（三）生野挙兵浪士の逃げたルート

文久三年十月十二日に尊攘派浪士による生野挙兵が起こるもすぐ壊滅した。『山崎町史』および『一宮町史』によれば、宍粟郡に逃れた浪士は三つのグループだった。沢一行は福知→深河谷→山越えで上野→岩野辺→千種→志引峠→作州へと逃げた。前木一行は養父郡奥田路→千町→福中→福知→木ノ谷→庄能→葛根→三河→長谷と逃げた。美玉一行は神子畑→黒原→三方町（→西深→深河谷→谷→ルートか？）→安積と逃げて木ノ谷で最後をとげた。

ここで私が注目するのは、両町史が当時の「三方街道」を上岸田→三方町→深河谷→谷→安積としていることで、生栖～嵯峨山ルートは元禄の国絵図にも記されながら使われなかったのは、片岡醇徳も書いたように岩山と激流に挟まれた難所だったからだろうか。

写真③　明治三十年測量の地図。田井から与位に山越えの小径を示す破線がみえる。
田井と清野の橋の位置は今とちがうことがわかる。

三　中川医院前の道路

（一）会報の一三四号で、町内から生谷橋へ行くには大歳神社からの真っ直ぐな道があり、小型バスもその道を通ったと書いた。中川医院の前の道が出来たのは、今の生谷橋が掛けられた昭和三一年の前頃としていたがずっと気になっていた。龍野土木事務所宍粟事業所で聞いても資料は無く頼りは人の記憶。幸い知人がこの件に詳しい地元の方を紹介してくれたので聞きに行った。

昭和七年生まれのその方が二十歳の頃（昭和二七年頃）、今の庄福店辺りの土地を削りトロッコで現鉄屋酒店方面に運び新道を造る工事をしていた（中央商店街から伸びた道に合流）。そして生谷橋を木橋から今の頑丈な橋に替えた際に橋のたもとは一・五メートル程高くなった。元々東からの脇道に木の鳥居があったとのこと。

その工事の時に、付近にあったらしい古い石碑を預かってくれと頼まれ、敷地に置いているとのこと。早速見せてもらった。

④石碑の正面

⑤石碑の左側

石碑は縦一二〇cm、横三五cm、奥行き三三cm。翻刻を試みた。

正　面

高家
之庄

永代橋

岩野辺中小茅村中
□源左衛門□與市郎
内ノ海中　下ノ村友吉
鷹巣村　大谷村条蔵

世話人

治郎太夫
平右衛門
傳□

左　側

弘化二年
巳九月日
□輪九衛門

伊澤
都多
近在
町方

谷中

□は不明の文字

（二）弘化二年に、庄能や蔦沢地域（高家ノ庄）に加えて、北部の小茅野や、千種地域の内海・鷹巣・岩野辺の村々、山崎の町や近在の村々が、新しい橋の完成と繁栄を願ってこの石碑を建てたと思われる。他の二面は見えないが、右側を半分掘ると、人名と共に「徳王寺」「問屋中」などの文字もうかがえた。伊沢川筋も宍粟郡の南部と北部を結ぶ重要なルートであったことがうかがえる。

もしやと期待して、宍粟市立図書館で山崎藩『国元覚帳』を借りてさがしてみると、弘化二年八月二七日条に以下の記述があった。

庄能村・生谷村・上寺村の三村から生谷橋建設の願い出が昨年出され藩として了承した。しかしこの度上ノ村の者も加わり土橋にさせてくれと申し出てきた。万一土橋が流失したら当初案の通り板橋を掛ける。もし又再び土橋を掛けさせてもらう際には材木の追加はお願いしません、と。藩としては今回限りの事であるとして、必要な材木を提供することにした…というのが要旨である。弘化二年の月日からして、上記の石碑と関係があると思う。

山崎藩『国元覚帳』は行政を担う武士の公私の動静を記録したものが中心である。一般庶民のことが記載されるのは、ある村の井堰や橋を修築する材料や費用を藩が援助する（以前庄能・三津間の橋の修築願いを紹介…公共事業）、川にカニをとる籠を仕掛けるのを許可する（運上金を払う）、出火原因の取り調べ、不行跡な者が家出し行方不明になった時に一族が後難を恐れて絶縁・除帳を申し出る、孝行者を誉める、など様々である。

⑥

さて。上の写真⑥は、一宮町の深河谷自治会が発行した『郷土ふかだに』（平成一九年）に掲載された昔の木橋の「深生橋」である。先述の地元の方にこの写真を見てもらうと、前の木橋の生谷橋はこれとほぼ同じだったとのことである。

四　記録と伝承

（一）昔の事がわかりにくい一つの理由は、生活の中の当たり前のことは記録されにくいということである。

私は今でも後悔することがある。郷里には入浜式塩田があり、その施設や作業は日常の風景のひとつだった。昭和三十年代にやめた後は施設も作業も目にすることはなかった。大人になったあと塩田については書物で他地域の記録写真をみるしかないことになった。

当たり前の日常を珍しく思い、絵や文に書き、写真を撮るのは旅人や異国の人である。旅行記、難破船漂流記、イエズス会による『日葡辞書』などは貴重な資料となっている。

（二）左の図は『未曾有と想定外』畑村洋太郎（講談社・二〇一一）からの引用である。畑村氏は、辛い事を忘れ前向きに生きていく知恵を認めつつ、災害対策をたてるときには、過去の出来事の記憶（伝承）が大切だという。

記憶の滅衰法則
・個人…３年で忘れる
・組織…30年で途絶える（転退職異動）
・地域…60年で地域が忘れる
・社会…300年で社会としても忘れる
・1200年…貞観地震もなかったことに

あれはどうだったかという事は年月を経るとともに思い出しにくくなる。体験者から話を聞いても語り継がないとそこで途切れる。聞く方もどの人が何をどれだけ知っているかがわからない。地元で生まれ育った人と私とでは情報量に差があり、自分は少し見当違いをしているのではないかと、会報原稿の下調べをしながらふと思う時がある。

（三）私は特に「道」に関心があるわけではないが、ネットで検索するうち土木史研究者達による「秋葉古道の成立過程と果たしてきた役割の研究」（二〇一二）という論文を見つけた。それによれば、中世以前は、見通しが良い、乾いて歩きやすい、崖下を通らず落石の危険が無いなどから尾根道が多かった。江戸時代以降は戦がなくなり、「途中の集落を経て商売も可能な中腹の道を、明治時代以降に荷車や牛馬車・自転車などの車両が出現すると、徐々に勾配の緩やかな谷底のコースを通るようになった」そうである。信州～遠州とは地形も違うが、この地域でも参考になるのだろうか。

伯牙弾琴鏡の銘帯の「璥」について

片山昭悟

①伯牙弾琴鏡について

伯牙弾琴鏡は、瑞雲双鸞八花鏡とともに奈良時代の代表的な鏡であり、奈良時代に日本人にもっとも好まれた鏡です。奈良時代の鏡を研究する上で重要であり、これらについて今回、調査によって確認できたものも含めて考察を試みました。

鏡の文様構成は外帯と内区からなります。内区は蓮池からはえる蓮葉に亀が乗り鈕となり、左には竹林をバックに琴を弾く伯牙がみえ、右には岩上にはばたく鳳凰を配しています。上には山にかかる雲と月、瑞雲の中に霊山や飛鳥を配しています。

中国では唐代においては、もっとも多く見られます。神仙故事思想の鏡の「真子飛霜鏡」や銘帯のある伯牙弾琴鏡の八花鏡、銘帯のない八花鏡、円鏡などが見えます。「高士弾琴鏡」とも呼ばれています。

神仙思想の図や銘文などから道教と関連する鏡とされています。日本では東京国立博物館蔵の法隆寺伝来鏡はじめ多くの鏡がみられます。外形が円形で外区に銘帯が入るもの、銘帯のない八花形、銘帯のない円形のみにしたものなど3つのタイプに分類されます。

②奈良時代の鏡　伯牙弾琴鏡の銘帯の「璥」について

伯牙弾琴鏡の銘帯の「璥」については、璥のみ天地です。

璥については、『説文』によると、「玉也、従王敬聲」とあり、鏡につけられたもので、鏡全体について総じて「璥」、玉に敬としています。

この「璥」のみえるは、中国鏡には極少なく国内の鏡に多くみられるもので、梅原末治『欧米に於ける支那古鏡』一九三一によると、中国唐鏡には＊の印がみえるものもあります。

梅原末治「近時所見の本邦での唐式鏡」『古代学』第一巻第三号一九五二には中国出土鏡の八花形の銘帯を持つタイプの鏡が紹介されていますが、中国唐鏡には「璥」は見当たりません。

おそらくこのような中国の銘帯をもつ八花鏡を原型にして、＊の印ところに、「璥」を入れて初めと終わりを繋ぐ意味があるものと考えられ、円鏡で、外縁に銘帯をめぐらせて伯牙弾琴鏡が国内で多量に踏み返し鋳造された可能性もあるのです。

③私の調査でわかったこと

伯牙弾琴鏡の銘帯については、中野政樹先生の「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその鋳造技術」『東京国立博物館紀要　第八号』東京国立博物館一九七三の前橋八幡宮の伯牙弾琴鏡（p183）で、「とくに最初の璥は、横向きにして紋様の頂点においている。」と紹介されています。

銘帯は隷書で次の通りです。なお、月のみが横向きです。

璥　鳳凰雙鏡南金裝。陰陽各爲配。日月恒相會。白玉芙蓉匣。翠羽瓊瑶帶。同心乃。心相親。照心照膽保千春。となります。

南金装（美しいでき）　陰陽各為配日月（おんみょう天地の間を

造り出すふたつ）　芙蓉匣（はすの花のはこ）　翠羽瓊瑶帯　（美しいみどりのはね）　同心乃　心が通じる　膽保たましい千春長い年月　璥（玉である）千春（千秋にもあたるようで、中国唐鏡には千秋銘の鏡がみられます）（千秋節は唐玄宗の天長節にあたります）

唐式鏡研究では「同心乃心相」とされますが、乃については、『上海博物館蔵青銅鏡』一九八七「87鳳凰双鏡葵花鏡の中国唐鏡の銘帯をともなう八花鏡によると、「同心人」となります。

④考察とまとめにかえて

奈良時代においては、当時は仏教の時代であり、遣唐使などで多くの中国の唐鏡がもたらされました。

銘帯をもつ伯牙弾琴鏡については、神仙思想の図や銘文などから道教と関連する鏡とされます。中国の唐鏡の伯牙弾琴八花鏡ではみられない円鏡の銘帯に、「璥」を付けて奈良時代に多く広まったものと考えられます。奈良時代に敬という字が大きくかかわったものと考えられます。

『大漢和辞典』によると、「璥玉也、従王敬聲」とされます。

「璥」は、王と敬からみて、王を敬うことで、伯牙弾琴鏡の銘帯になにか特別に付けられたものではないでしょうか。

なお、「璥」は、銘帯のはじめと終わりをつなぐ役割の一字であるものと考えられます。

「敬」ではなく、王と敬からなる「璥」になぜしたのでしょうか。

中国の孔子が伝えた儒学を学んだ遣唐使が、奈良時代に四書五経の中から「敬」ではなく、「璥」にしたものではないかと考えられます。

そして、銘帯のはじめに「＊」でなく、「璥」によって銘帯のはじめと終わりをつなぐ一字のみを横向きに取り入れたもので、銘帯のはじめの「鳳凰雙鏡南金装・・・」と終わりの「照心照膽保千春」をつなぐ一字は、敬ではなく王と敬からなる「璥」という重要な字にしたのではないかと考えるのが穏当であると思います。

なお、「璥」については、今後の奈良時代の鏡の調査研究できっと解明できるものと思われます。

図1　中国唐鏡伯牙弾琴鏡の拓影

中国出土・伯牙弾琴鏡（上海博物館蔵鏡）
『上海博物館蔵青銅鏡』1987より

2　伯牙弾琴鏡の拓影

伯牙弾琴鏡（岐阜県長瀬山出土鏡）
森本六爾「美濃に於ける仙人弾琴鏡出土の一古墳」
『考古学雑誌』15－11　1925

伯牙弾琴鏡（銘帯）「璥」の主な参考文献

中野政樹「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその鋳造技術」『東京国立博物館紀要第八号』東京国立博物館　一九七三　183～184p

中野政樹「奈良時代の鏡　東京国立博物館保管の唐式鏡（7）」『MUSEUM　5月号　第一五八号』美術出版社一九六四

26p3段のはじめ「とくに最初の璥は、横向きにして紋様の頂点においている。」

後藤守一「本邦出土の唐式鏡」『考古学雑誌』第二十一巻第十二号　一九三一　864p「その最初に「璥」字を向きを異にし、上下の位置においてゐる。」

梅原末治「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」『史迹と美術』第二〇一号　一九五〇　43p下「背文は従来出土例の多い周辺に「鳳凰雙鏡南金装」にはじまり「照心照膽保千春」の銘を容れた伯牙弾琴鏡である。」

梅原末治「近時所見の本邦での唐式鏡」『古代学』第一巻第三号一九五二　236・237p

梅原末治『欧米に於ける支那古鏡』刀江書院　一九三一　108p　図版（一）白牙弾琴八花鏡拓影

帝室博物館編『天平地寶』帝室博物館　一九三七　図版六〇・六一鏡鑑　四二中央獣鈕の上に雲山飛鶴下に池中四岳をあらはし向って右に鳳凰左に高士弾琴鏡の状をうつし、周縁を繞つて「鳳凰双鏡南金荘、陰陽各為配日恒相會白玉芙蓉匣翠羽瓊瑶帯同心乃心相親照心照膽保千春璥」の文字を出す。

朝日新聞社編『天平の地宝』朝日新聞社一九六一　52　高士弾琴鏡　愛知・西幡豆　32～33p　「鳳凰双鏡南金荘陰陽各為配日恒相會白玉芙蓉匣翠羽瓊瑶帯同心乃心相親照心照膽保千春璥」＊璥は横向き

香取神宮『香取神宮宝物図鑑』一九四〇　第三図　伯牙弾琴鏡（下）22p

杉山洋『日本の美術　古代の鏡』至文堂一九九九　40p

片山昭悟『奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様』一九九四　34～38・82～85p

片山昭悟『奈良時代の鏡研究　兵庫県宍粟郡山崎町金谷出土の瑞雲双鸞八花鏡のルーツをもとめて』　9～10・25p

片山昭悟『奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様　続編』一九九九　44～48p

片山昭悟『奈良時代の鏡研究　出土地・伝世地を訪れて』一九九八　109～111・136～141p

図２伯牙弾琴鏡（銘帯）
『奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様』より

補稿　敬について

鎌田裕明先生は、山崎闇齋先生による「敬」について『山崎郷土会報』に多く紹介されておられます。

「敬の一字は儒学の始めを成し、終わりを成す」とされておられることから奈良時代の伯牙弾琴鏡銘帯の「璥」と関連することがわかり紹介させていただきます。

＊1鎌田裕明「天地明察と闇斎先生」『山崎郷土会報百二十一号』25・8・25によると、

「それ敬の一字は儒学の始めを成し、終わりを成す工夫にして、その来ること久遠也。」（註22）

22山崎闇斎『敬斎箴講義』岩波日本思想体系31　80ページ

＊2鎌田裕明「「敬」について」『山崎郷土会報百二十三号』26・8・24によると、

二　敬の一字は儒学の始めを成し、終わりを成す工夫

『闇斎先生講義』「それ敬の一字は儒学の始めを成し、終わりを成す工夫にして、その来ること久遠なり。天地の開き始まりよし以来、代々の聖人道統の心法を伝え来たり給うふも、この敬に過ぎざるなり」

＊道統の心法とは儒家の正統性をいう言説で代々聖人によって伝えられてきた（道統）、こころの教え（心法）の意味です。

「敬」はこれまでの聖人（儒家の正統を継ぐ人たち）の心法（精神修養の法）であると解されています。

＊3『山崎郷土会報百二十二号』26・3・10によると、

鎌田裕明先生より前回「敬」が闇斎学のキーワードと紹介したところ会報部長の片山昭悟氏から、奈良時代の代表的な鏡「伯牙弾琴鏡」の銘帯に

「璥　鳳凰雙鏡南金装　陰陽各為配　日月恒相會　白玉芙蓉匣　翠羽瑇瑤帯　同心人　心相親　照心照膽保千春」とあること、及び敬との関わりや文字の使用例について貴重な示唆を頂きました。記して謝意を表します。と紹介していただきました。

＊4鎌田裕明先生による「敬」についての研究によると、

闇斎は「敬斎箴付録」の冒頭に、朱子が「敬斎箴」の後書きに、敬の一字、学者がもし能く実にその力（敬の一字の）を用いれば、程子両言の訓と雖もなお剰語となる、と書いているのを引用しています。「一身五倫」と「敬」は闇斎学の基本なのです。

＊5鎌田裕明先生の「山崎闇斎先生生誕四百年にあたり」によると、今日に生きる敬（考えの例）・・・人間関係で、最も大切なのは、「敬」の心で、人を敬い、大切に思う心です。

山崎闇斎先生の「敬」については岡田武彦氏、中国思想の丸山松幸氏の易経の「敬」についての文献をご教示いただきました。

参考文献

山崎闇斎『敬斎箴講義』岩波日本思想体系31

山崎闇斎『敬斎箴序』

四書五経は、四書は、大学、論語、孟子、中庸で、五経は易経、書経、詩経、礼記、春秋で、学問、思想の基礎となったもの。五経は紀元前にできて、四書は宋の時代にまとめられたもの。

朱子学は、朱子学を大成させた南宋の朱子が五経の礼記にあった二編を、大学と中庸で、論語、孟子を合わせて四書としました。「璥」は、四書五経の四書の論語、五経の易経の中からおそらく用いられたのではないかと思います。

会員・家族の文芸

◎冠　句（つた・いさわ・加生・山崎冠句会）

願い込め　星降る里のにぎわいを　宇田　幸夫
ほっこりと　土筆仲良く背比べ　宇田　幸夫
願い込め　心に花の種を蒔く　坂本　忠彦
ほっこりと　他人には見せぬ老の春　坂本　忠彦
願い込め　豊作夢に豆植える　実友　勉
ほっこりと　孫に誘われキャッチボール　実友　勉
願い込め　握手できる日来る事を　嶋津　千里
ほっこりと　園児が話す島根弁　嶋津　千里
願い込め　村の神社で祈願する　為国真佐行
ほっこりと　土の中から頭出す　為国真佐行
願い込め　和顔愛語の国となれ　谷笹　まや
ほっこりと　差し出された手ありがとう　谷笹　まや
願い込め　茅の輪くぐりて幸祈る　高井　怜依
ほっこりと　やさしい言葉心打つ　高井　怜依
願い込め　小銭をためる貯金箱　西家　侑希
ほっこりと　顔がほころぶ甘い菓子　西家　侑希
願い込め　世界の平和歌声に　三木ひづる
ほっこりと　花びらひらり樹の下で　三木ひづる
願い込め　平和安全いつまでも　飯塚　正浩
ほっこりと　日向で眠る猫を見て　飯塚　正浩
願い込め　日和頼みの豆づくり　大谷　志路
ほっこりと　首まで浸かり疲れ取る　大谷　志路
願い込め　冠句作りに本を見る　中瀬　公三
ほっこりと　夫婦並んで畑の草　中瀬　公三

◎俳　句

貞観の大地震の痕青葉光　京屋　伊助
風光る荒ぶる神の風土記かな　京屋　伊助
華やげる親子二代の雛の間　杉山美保子
天気褒め紅葉も褒めて露天風呂　杉山美保子
馬鈴薯の花や夕餉の匂ひつれ　高井　麗子
耕しの打てる一鍬土の声　高井　麗子
風逸れて安堵す農夫稲の花　田中　良子
てきぱきと白き歯をみせ日焼けの子　田中　良子
峡谷の旅の想い出夕河鹿　鳥羽チエノ
一鳴きの鳶の余韻や夏野行く　鳥羽チエノ
鶏の水飲む庭の日永かな　三浦　ゆき
打ち水に生き生き庭の息吹きかな　三浦　ゆき
法師蝉声絞り鳴く日暮れかな　高井　智代
夕立の去りてちりぢり雨宿り　高井　智代
恩寵の余白をいかに青葉闇　速水美知代
涼こぼす句碑の慕情の細き文字　速水美知代
蛍（はうたる）を探しに行ったままの兄　宗平　圭司
退院の腕田植えには細すぎて　宗平　圭司
ウイルス禍人に出会はぬ春の宵　里見　和樽
歳時記の季題溢るる夏来る　里見　和樽

事務局だより

令和二年度の通常総会について

記

日　時　令和二年四月十一日（土）午後二時より

場　所　宍粟防災センター四階研修室

議　事　一、令和元年度事業報告について

二、令和元年度会計報告について

三、令和元年度監査報告

四、令和二年度事業計画について

五、令和二年度会計予算について

記念講座として、記録映画「遺跡は語る　Part2『伊和中山古墳』」の上映の予定でした。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため

令和二年度の郷土研究会の総会をやむをえず中止にしました。

令和二年度の研修旅行中止のお知らせ

毎年実施していました研修旅行は、新型コロナウイルス感染防止のため、やむをえず中止にしました。

編集後記

『山崎郷土会報　第一三五号』をお届けします。

令和二年度の郷土研究会の総会は、四月に予定していましたが、新型コロナウイルス感染予防のためやむをえず中止になりました。

第一三五号は、みなさまに原稿をいただき、ご協力のおかげで充実した号になりました。

大谷司郎会長は「明治以降の山崎の年表（八）について」、伊藤一郎さんは、永年山崎美術協会のリーダーとして「山崎の美術の流れ」について、鎌田裕明さんは「福原兼七と『論語』もう一つの読み方」について、竹内克司さんは「広瀬宇野氏滅亡後の宍粟」について、今回三渡眞由美さんは、女性の視点で「山崎婦人会発足の歴史と現在」について、河本雅視さんは山崎歴史郷土館（五）「山崎町の歴史（安土桃山時代～江戸時代前期）」を、清水哲さんは「空中写真と地図（その4）」について、私は「伯牙弾琴鏡（銘帯）の瑕について」、そして、会員・家族の文芸です。

会員のみなさまに読んでいただいてわかりやすいもので興味のあるもの、地域の話題として必要なものであることを心掛けています。

なお、頂いた原稿は、原文尊重を第一として編集しています。

（片山昭悟）

山崎郷土研究会副会長の伊藤一郎さんが、二〇二〇年春の叙勲で旭日小綬章を受章されました。地方自治功労で、永年山崎町議会議員と宍粟市議会議員としての三十年のご活躍に対するものです。まことにおめでとうございます。

●相続手続時、名義変更に関するアドバイス
●各種税務手続き
相続税・贈与税確定申告手続　電子申告環境サポート
所得税確定申告
●経理自計化のお手伝い
●法人税・地方税・申告書作成代行
●経営助言

〒671-2533 兵庫県宍粟市山崎町須賀澤1329-7
高橋利典税理士事務所
税理士・行政書士　高　橋　利　典
TEL (0790) 63-2150／FAX (0790) 63-0445

パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671−2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62−0254 FAX (0790) 62−4764

外科・内科

山中医院

院長　山中潤一

山崎町西町・TEL ⑫0036

ほっと、ひといき

伊沢の里

●各種宴会　祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
●宿泊　観光、ビジネス　帰省
●日帰り入浴　糀風呂、露天風呂、サウナ
●レストラン　御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214−1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S
スタジオウエヤマ

●山崎店　兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

株式会社 **安井書店**

兵庫県宍粟市山崎町山崎90　〒671-2577
TEL (0790) 62-0700㈹　FAX (0790) 62-0700

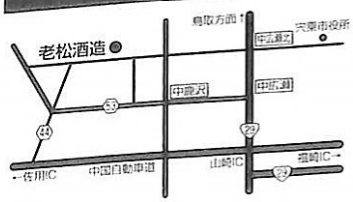
E-mail:gaisyo@yasuisyoten.co.jp
URL:http://www.yasuisyoten.co.jp/

老松酒造有限会社

■老松ダイニング
発酵と麹の健康ランチ
定休日:木曜日(予約優先)

■老松販売所
日本酒・リキュール・麹商品

老松酒蔵見学出来ます



〒671−2577
宍粟市山崎町山崎12
電話0790−62−2345

まごころを伝えます。

地酒 **山陽盃** 醸造

確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

一献献上　品質本位

播州一献

TEL.0790(62)1010　FAX0790(62)6218
E-mail　info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com